

この「八紘一宇」の発想も戦後「日本の植民地主義の根拠となった」などと批判されてきた。いまだにこの言葉に拒否反応を示す日本人も少なくない。しかし、そうした色眼鏡ではなく虚心坦懐(きょしんたんかい)にこの言葉を目にするなら、出雲井さん同様、西欧社会の立憲君主制や民主主義を何世紀も先取りしたような、古代の国造りの理想像が見えてくるはずである。
檀原神宮のビデオが、神武天皇のことを初めて知る人たちの心を打つのも実はこの国造りの姿勢なのである。

抹殺と復活 危機の時代にこそ必要

「紀元節」が祝日として制定されたのは明治六年のことだった。時代を代表する俳人・歌人、正岡子規はこんな詩を詠んでいる。
「日の本の国のはじめを思い出て、その日忘れず梅咲きにけり」
明治の人々がいかに素直に「建国」を祝っていたかが馥郁(ふくいく)と伝わってくる。

しかし、昭和の敗戦で「紀元節」は戦勝側から徹底して糾弾(きゆうたん)される。昭和二十年二月、GHQ(連合国軍総司令部)が国家神道の解体を目指して出した「神道指令」では手つかずだったが、二十三年、新たに法律で祝日を定めることになったとき廃止された。事前に政府が国民にアンケートしたところ「紀元節」は「元日」などと共に上位を占めたのに、GHQは「紀元節だけは許さない」と、譲らなかつたからだ。

國學院大学の大原康男教授はこう言う。
「占領軍が一番恐れたのは、天皇を中心とした歴史に培われた日本人の団結力だった。その背景に彼らのいう神話があると認識し、教育現場とともに祝祭日を通してそうした精神が養われてきたと考えたのです」

大原教授は「しかし、そこには日本の国家神道に対する誤解や過大評価があった」と語る。つまり、どの時代でも「戦争が思想を生む」のではないからだ。戦前の日本でも、満州事変以降、つまり戦争に突入したあとに国家神道や「八紘一宇(はつこういちう)」の思想が戦争に利用されたに過ぎない。「八紘一宇」といったむしろ博愛主義的な発想が戦争を生むものではなく、その点をGHQは誤解していたのである。

だが、日本が独立を回復したあとの昭和二十八年、NHKが行った世論調査では「紀元節復活」を支持する意見が八〇%を超える。これに力を得て三十二年から何回も祝日法改正案が提出され、四十一年ようやく成立する。
しかし、どの日を建国記念の日にするかについては「春分の日」案や「憲法記

すやま通信

特別号

紀元節奉祝歌

雲にそびゆる高千穂の
高根おろしに草も木も
なびき伏しけん大御代を
仰ぐ今日こそたのしけれ

海原なせる埴安の
池のおもよりなお広き
恵みの波にあみし世を
仰ぐ今日こそたのしけれ

空に輝く日の本の
よろずの因にたぐいなき
因の御柱たてし世を
仰ぐ今日こそたのしけれ

念日」案なども出て難航、結局、審議会での協議を経てようやく二月十一日に決まった。
二月十一日に反対したのは今度は、日本の学者・文化人といわれる人々であり、「紀元節は歴史的に実証されていない」「明治になって生まれたものだ」といった反対理由だった。

興味深いのは、こうした反対論を一蹴(いっしょく)することになったのが歴史学者の津田左右吉(そうきち)だった。津田は古事記、日本書紀の内容を批判的に読む文献史学の第一人者で、戦前は「皇室の名譽を傷つけるな」などとして、著書が発禁となることもあった。それだけ文化人たちは信望があった。

しかし、その津田が「建国の日をもうけたい」という論文を書き、その中で「歴史的事実としての建国の日はわからないが、二月十一日でもかまわない」という大人の論を展開、これが追い風となった。

大原教授はこうした反対論に対し、建国の理想を古代におくことで明治維新のフシキブル(柔軟)な改革が可能になった側面を強調する。

「例えば廃藩置県にしても封建制度をなくすことへの武士の抵抗は強かった。しかし、古代の神武期には封建制はなかったという論理に説得力があった」と。

ただ、紀元節が「建国記念の日」として復活しながら、その起源や由来について何ら国民が教えられないことも、考えることもなく、事実上建国の日が空洞化してきたのも事実である。

政府にも積極的にこの日を祝おうという空気は薄い。「国民の祝日を祝う会」という建国の文字がひとつも入っていない財団法人が主催する「建国記念の日を祝う国民式典」に首相が出席するだけとなっている。

「建国記念の日」が始まった昭和四十二年以来、日本は未曾有(みぞう)の高度成長に酔い、日米安保条約によって平和を享受してきた。その意味では国民が特に団結を必要とすることなく、建国の理念を持ち出す必要もなかったのかもしれない。
今、天智・天武期や明治維新时期と同様、内外の危機にさらされているといえはオパー(オパー)かもしれない。しかし、国民の意識から「国家」というものが失われ、経済危機や予感される安全保障の危機に対応できなくなっているのは事実である。
この時代にこそ、先人たちが危機の時代に「建国の理念」にかえり、苦難を克服していった歴史を思い返すべきではないだろうか。

(産経新聞 平成十一年二月九日(十一日より))

発行 陶山神社社務所
佐賀県西松浦郡有田町大樽二一五一一
〒844-0004
TEL 〇九五五(四二)三三一〇

建国記念日の意味

毎年二月十一日は建国記念日であり、「建国をしのび、国を愛する心を養う日」として国民の祝日に定められ、我が国が国家として成立する際に尽力された先人に対する感謝の気持ちと、こうした努力により建国された祖国への愛国の心を育むための日とされています。

戦前、この日は「紀元節」と呼ばれており、初代の神武天皇が葦原中津国(あしはらなかつくに・日本)を平定なされ、檀原宮にて御即位された「辛酉(かのととり)年春正月庚辰朔(かのえたつこのついたち)」の日を、現行暦に合わせて算定した二月十一日があてられました。

我が国を建国なされた神武天皇に対する朝野の篤い崇敬は、近世以降、神武天皇をお祀りする神社創建(檀原神宮)の動きにも見えました。また、明治維新に際して、「諸事、神武創業の始めに原(もと)づく」ことを国の方針とした新政府により、神武天皇御即位を我が国の紀元と定めて、明治六年には紀元節が祝日として制定されました。

戦後、占領下による一時的な混乱により、紀元節はやむなく廃止されましたが、我が国の建国を祝う日の復活を強く願う国民全般の声により、昭和四十一年には建国記念日として法制化されて、縁(ゆかり)深き二月十一日が選ばれました。

私たちが新たな時代に向かって歩んでゆくためにも、我が国の基(もと)いを振り返るこの日は、大切な意味を持っているのではないのでしょうか。
(神社新報 平成十一年二月八日付「神道いろは」より)

建国記念日を前に

二月十一日は建国記念の日、戦前は紀元節と呼んだこの日は、かつては祝祭日の中で最も国民に親しまれていた日本国の誕生日である。神武天皇が奈良・檀原で初代天皇として即位されたと伝えるこの日には、全国の学校で式典が行われ、学童には紅白のお饅頭が配られた。紀元節は国民に定着して、戦後も九割は存続を強く望んだのだが占領軍はこれを許さず、強制的にこの日は祝日から追放された。熱心な国民運動の結果、ようやくこの日が建国記念日として復活したのは昭和四十二年のこと、それから三十二年が経過した。

この日、神武天皇を祀る檀原神宮では天皇陛下より勅使が差し向けられ祭典がある。戦前は小中学校や役場などでも、これを遙拝する儀式をするのが一般だったが

いまはない。現代の子供たちの大半は、儀式への出席はおろか、この日がどんな日であるか説明されたこともないかもしれない。戦前と戦後の学校風景の違い。それは戦前戦後の国民の国との関係の変化に重なっている。国への国民の認識と信頼の関係が変わったから、学校の子供への権威も弱まり、学校の教育効果も上がらなくなった。

国民が国に対し忠誠を尽くし、国を大事にするようになると、一人一人の生活が不自由になると信じる勝手な誤解が広まって五十年近い日が経過した。これは国が国民に支持されて強くなると、専制政治に移行するとの見解と、国民の自由と無法勝手との履き違いからきた全く根拠のない迷信である。

国の進路は国民が、存分に意見を尽くして決めればよい。決めた結果を徹底できるか、中途半端にしか進められないのかは、国の力によって決まる。個人の自由や財産を守る力の源泉は国にある。だから国は強いに越したことはない。

だが戦争後、国をバラバラにさせるために、国とは何かを意図的に誤解させ、国民の頭を混乱させようとした占領軍の作った宣伝に、愚かにも国民が騙されたところから現代の日本は、国内は乱れ、対外的にもいつも馬鹿にされるような歪んだ国になってしまった。このままでは、時代の流れを乗り切るなり、独自の道を歩くことは、ほとんど無理に見えないではないか。

建国記念日を迎えるにあたり、もう少し日本という国をしっかりさせるにはどうしたらよいかを考えてみたい。我々が安心して穏やかに生き、ささやかではあっても明るい気持ちで毎日が暮らせるような社会、それはしっかりした国が我々の背後にあって、守ってくれることなしには実現しない。人間は一人では暮らしてはいけない。家庭があって社会があって、国がある。それがしっかり機能しなくては、不安はいつも離れてはくれぬ。

建国記念日には多くの集会有る。それらの中には一部、五十年経っても占領軍の宣伝にまだ騙された日本嫌いの集会もある。だが大半の集会や集いは、国を良くしたい人々の集まりだ。神社では祭典がある。今年から神社の祭典に参列し、そんな集会に出てみてはいかがだろう。この日はまずは手始めに、全国民が国の大切さを論じ合う意義ある年中行事に復活させたいと思うのだが。

(伸) (神社新報 平成十一年二月八日「視角」より)

## 教科書が教えない建国記念の日

関心高まる「神武の時代」 伝承と由来

田木喜久

『教科書が教えない日本の神話』など意欲的に神話の世界を書いている作家で日本画家の出雲井嶋さんが今年一月、今度は『教科書が教えない神武天皇』(産経新聞社発行、扶桑社発売)を出版した。

『神武天皇』の序文に「この日は、我々が安心して暮らすことのできる社会を築くための礎となるべき日である」とある。この日は、我々が安心して暮らすことのできる社会を築くための礎となるべき日である。この日は、我々が安心して暮らすことのできる社会を築くための礎となるべき日である。

扶桑社の星野俊明編集長は、「私自身を含め、日本人があまりにそうした世界を知らな過ぎた。それに気づき始めたという点では、我々も『自分たちのルーツとは何か』という点に関心を抱き始めたのではないかと感じる。」と述べている。

歴史学者の中には神武天皇やその建国伝承を全面的に否定する立場もある。その一方で、実在と関係なく「古代史の謎を隠している」として、「邪馬台国の東征を物語っている」とか、「騎馬民族説を実証するもの」など、何十にも上る解釈が行われている。

しかし、それよりも大事なことは、古代の昔から「神武天皇」とその時代が何百年にわたって語り継がれ、治世の理想像とされてきたことなのである。不思議なこと、この国が内外の危機に直面したとき、必ずその治世が思い出されてきたのである。

この国の祖先たちは建国伝承の中にどんな理想像を見て、「神武に還れ」と言ってきたのだろうか。そして今また、それが見直されようとしていることにどんな意味があるのだろうか。

## 維新と「神武の時代」 明治の国造りの規範に

日本の最古の貨幣はこれまで通説の「和同開珎」ではなく、七世紀後半に造られた「富本銭(ふほんせん)」だった。新聞紙上を賑わしたこのニュースの面白い点は、天武天皇の時代(七世紀後半)の国造りを彷彿させることである。

六六三年、白村江(はくすきのえ)の戦いで敗れた後、日本は朝鮮半島を支配した唐の脅威にさらされていた。このため、天智天皇や天武天皇は、全国民を糾合(きよくご)した強力な中央集権国家を造ること、これに對抗しようとした。

戸籍をつくり、律令(法律)を整え、軍勢力を強化した。貨幣造りもその一環であり、日本書紀の天武十二年(六八三年)に「今より以後、必ず銅銭を用いよ」と記された。自らの貨幣を持つことが「国家」としての必要条件だったからである。

しかし、「国家」が国民の心を束ねていくため、もう一つやらねばならぬ大仕事

「すべての人々が安らいで豊に暮らせるよう、大和に都を造ろうではないか」。そう思い立たれた神伊波比古命(かむやまといわれびこのみこと、神武天皇)の一行は、日向(宮崎県)を船出し、日向灘から瀬戸内海を東に向かう。難波から大和に入ろうとするが果たせない。今度は紀の国(和歌山県)の熊野に上陸し、辛苦を重ねながら八咫の鳥(やたのからす)に導かれ、ついに大和を平定される。

これが、古事記や日本書紀(記紀)に書かれた建国伝承の概略である。ちなみに日本書紀では神武天皇を神日本磐余彦天皇(かみやまといわれびこのすめらみこと)表記している。

書紀は天皇即位の場面を簡潔にこう記す。

「辛酉(かのとり)年の春正月の庚辰(かのえたつ)の朔(ついたち)に、天皇、橿原宮に即位す」

この「辛酉の正月庚辰の朔」を西暦に直せば、今から二千六百五十八年前の二月十一日に当たるとして、明治になって二月十一日が「紀元節」と制定され、国の始まりを祝ってきた。これが戦後、占領軍により廃止されたあと昭和四十二年「建国記念の日」として復活したのである。

「建国の地」となった「橿原宮」は奈良盆地の南、大和三山のひとつとして知られる畷傍山の山裾にあった、と伝えられてきた。その鬱蒼(うっそう)とした常緑樹の森に包まれるように、神武天皇を祀る橿原神宮が立つ。十一日には全国から五千人以上が集まり、紀元祭が開かれる。

普段でも参拝者の数は多い。近くにある明日香村を訪れた、ついで、に立ち寄る若者たちの姿も目立つ。

神社側は、そうした参拝者たちを相手にある試みを行っている。『日本のあけぼの「神武天皇」』というビデオを見せようのだ。

神武天皇の話をつらつらと聞かせる試みは、見た人のほとんどが「へーっ。神武天皇ってそういう人だったんですね」とか、「聞いていたイメージとだいぶ違った」といった感想を残していくという。

戦後の日本は、その歴史から「神武天皇」を抹殺するが、マイナスイメージを描いてきた。歴史の授業で教えられることはほとんどない。大半の人は古事記にも日本書紀にも触れたことがない。「ああ『神武景気』といわれた、あの…」などまだましな方である。

だから、れっきとした国民の祝日としての「建国記念の日」がありながら、その起源・由来について教えることも考えることもない、という矛盾の中で、二月十一日もつるに響けしかなかったのである。

ところが今、その神武天皇が「復活」しようとしている。

があった。国の歴史を編むことだった。

天武天皇は六八一年刑部(おさかべ)親王らに対し、それまで伝わっていた帝紀、旧辞などを整理するよう命じた。これが約四十年後『日本書紀』として結実、一方では天皇自身、神田阿礼らと独自に旧辞などの検討を行い、こちらは『古事記』として実を結ぶのだ。

この歴史編纂の課程で、多くの伝承の中から「国の始まり」として重きを置いたのが「神武の時代」だった。国民結束の核として神武天皇を置いたのである。

それから千二百年近い歳月が流れる。明治維新である。いつ西欧列強の植民地にされるかもしれないという危機感の中で、新しい国民団結の政治体制をつくらなければならないとした。その点で天智・天武期の政治改革とよく似ていた。

維新を決定づけたのは慶応三年十二月、岩倉具視ら朝廷側から出された「王政復古の大号令」だった。この中で「諸事、神武創業のはじめにもつき…」と、やはり「神武の時代」をモデルに、国民の心をひとつにして公平な議論をし、立派な国造りをしようと呼びかけた。このため、明治六年に初めて設けた祝日が二月十一日の「紀元節」だったのである。

しかし、國學院大学日本文化研究所の大原康男教授によれば、この「神武への回帰」には曲折がなかったわけではない。

最初は、後醍醐天皇が鎌倉幕府を倒した「建武の中興」に還ろうという意見もあった。明治維新にとって後醍醐天皇を助けた楠木正成は神様の存在だったからである。しかし、これは失敗に終わっているということ、却下される。

また、天智・天武期の大化改新でどうだろうとの意見もあったが、岩倉の腹心だった国学者の玉松操が「この程度では氣宇が小さい」と言い、結局「神武創業に還る」ということになったのだという。

大原教授は「武家政権を倒して公家政権をつくるということだけなら建武の中興を理想としてもよかった。しかし、もっと大きな立場から新しい国をつくらうということ、神武」ということになったのだと思う」と言っている。

一体、「神武の時代」の何が国難の時代にあつて人々を引きつけるのだろうか。

『教科書が教えない 神武天皇』の著者、出雲井嶋さんは天孫降臨から神武東征にいたる日本の建国神話を貫いているものとして「素朴で物質文明に目をくらませられない豊かな心」をそこに見いだす。

出雲井さんは日本書紀の中で神武天皇が橿原建都に当たって「八紘(あめのした)を掩(おほ)ひて宇(い)え(と)為(せ)むこと、また可(よ)からずや」と詔をささげたのをこう現代語に訳す。

「天地四方、八紘にすむすべてのものが、一つ屋根の下の大家族のように仲良く暮らすのではないが、何と、楽しく嬉しいことだろうか」